

David Embick: *Localism versus Globalism in Morphology and Phonology*

Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2010. xii + 218pp.

竹腰 敦

1. はじめに

生成文法の流れを汲む理論言語学において、局所主義 (localism) と全域主義 (globalism) は2つの大きな流派を形成し、激しい論争を繰り広げている。局所主義者は、基底形に規則が段階的に適用されることによって適格な表層形が派生されると考える。一方、全域主義者は規則による派生という考え方を否定し、出力条件が表層形を決定すると考える。前者の代表は極小主義 (分散形態論) であり、後者の代表は最適性理論である。それぞれの立場を本書の直接的な研究対象である形態論と音韻論の接触領域の問題に限定して言い換えると次のようになる。局所主義的な考え方によると、形態論と音韻論は直列的に配置され、両者の相互作用は極めて限られた形でのみ存在する。一方、全域主義的な考え方によると、形態論と音韻論は並行的に計算されるので、両者の相互作用は比較的自由である。本書は「異形態交替 (allomorphy)」という現象を中心に2つの立場を比較し、局所主義が正しいと結論づけている。

「異形態交替」という用語には注意が必要である。本書で研究対象とする異形態交替は、2つ以上の異なる具現形があり、その一方が他方から音韻的に派生されるものではない場合に限られる。本書の理論的枠組みである分散形態論の用語で言い換えれば、語彙項目の競合 (competition) が関与する場合である。例えば、複数接辞の *-en/-ɹ/-s* (oxen/feet-ɹ/books) の交替が本書の研究対象であり、*/z/*, */s/*, */ɪz/* (dogs/books/watches) の交替は、音韻論がそれぞれの

形を同一の語彙項目から派生しているのでは対象ではない。本書の立場によると、-ity, -age, -tionなどの名詞派生の接尾辞は名詞主要部 h への語彙挿入において競合する異形態であることになる。

本書は、第1部(1章~3章)で著者による局所主義理論の枠組みが提示され、第2部(4章~6章)でその局所主義理論を全域主義理論と比較し、局所主義理論が経験的に支持されることを示すという構成になっている。そこで本書評もその構成に従うことにする。次の2節で第1部を要約し、3節で第2部を要約する。最後に4節で本書の課題と今後の展望をまとめる。

2. C_1 -LIN理論

本書で提案される局所主義理論は C_1 -LIN理論と名付けられている。この理論では、循環(cycle)と線状性(linearity)によって定義される局所性条件(1)を用いて異形態交替を説明するのでこの名前が与えられている。 C_1 の1は循環主要部(cyclic head)が1つ介在しても異形態交替に関する相互作用を許す(下記の過去時制接辞の事例)という意味である。

(1) 異形態とその交替を文脈的に条件付ける要素は

- a. 線状的に隣接していなければならない。
- b. 同一のPF循環内で活性的(active)でなければならない。

その他の関連する仮定をまとめると(2)のとおりである。

- (2) a. 語根(Root)は範疇中立的(category-neutral)であり、範疇を決定する主要部(category-defining heads)が範疇を決める。
- b. 範疇を決定する主要部はフェイズ理論の意味で循環主要部(cyclic head)である。
- c. その他の機能主要部(時制、数など)は非循環主要部(noncyclic head)である。
- d. 循環主要部 x が併合されたとき、 x の補部の中の循環領域がスペルアウトされる。
- e. x が主要部となる循環領域とは、 x それ自身、 x の補部、それと x の

edge⁺の要素（階層上 xP より上位にある非循環主要部）を含む。

- f. 循環主要部_xの補部は、次に高い循環主要部_yがスペルアウトされた PF 循環の中で活性的ではない。

これらの仮定に基づいて英語の派生名詞 (derived nominal) と動名詞 (gerund) の違いについて見てみよう。派生名詞を派生する接尾辞には語根に応じて多くの異形態 (-ity, -age, -tion など) が存在する。一方、動名詞を派生する接尾辞は -ing のみである。これはなぜであろうか。本書の仮定によると、派生名詞と動名詞の構造はそれぞれ (3a) と (3b) である。

(3) a. [$\sqrt{\text{ROOT}}$ *n*] (派生名詞 *marri-age*)

b. [[$\sqrt{\text{ROOT}}$ *n*] *n*] (動名詞 *marry- φ -ing*)

(3a) では、*n* より階層的に高い循環主要部が併合されたときに *n* とその補部、すなわち (3a) 全体がスペルアウトされる (仮定 (2d) より)。この場合、*n* と語根は同一の PF 循環の中にある。したがって、*n* への語彙挿入は語根の情報を利用することが可能となり、語根に条件付けられた異形態交替が許される。一方 (3b) では、*n* 主要部が併合されたとき、*n* が主要部の循環領域、すなわち [$\sqrt{\text{ROOT}}$ *n*] がスペルアウトされる。この PF 循環で *n* 主要部が語彙挿入を受け、 φ が挿入される。続く循環で *n* 主要部が語彙挿入を受け、-ing が挿入される。*n* 主要部が語彙挿入を受けるとき、その循環で語根は活性的でない (仮定 (2f) より)、動名詞の派生において *n* 主要部は語根を見ることができない。したがって、動名詞の場合、語根に条件付けられた異形態交替は許されず、常に -ing が挿入される。

次に過去時制接辞の異形態交替について見てみよう。過去時制接辞は *played/lef-t/hit- φ* のように語根に条件付けられた異形態交替を示す。本書の仮定する動詞の構造は (4) である。

(4) [[$\sqrt{\text{ROOT}}$ *n*] T]

(4) において時制接辞 T は *n* の外側に付加されており、一見したところ (3b) の動名詞の構造と同じである。それにもかかわらず、語根に条件付けられた異形態交替が可能である。これは仮定 (2c) と (2e) によって説明される。T は非循環主要部であるのでスペルアウトを引き起こさず、より上位の循環主要部

が併合されたときに ν を主要部とする循環領域, すなわち(4)全体がスペルアウトされる(T は $(2e)$ の edge^+ の要素)。PFで ν が切り取られ(pruning), その結果, 語根と T が隣接するため, 語根に条件付けられた異形態交替が可能となる。

3. 局所主義対全域主義

第2部では, 第1部で開発した局所性理論と最適性理論に代表される全域主義理論を比較している。議論の中心は, 局所主義理論では予測されず, 全域主義理論でのみ予測される異形態のパターンが自然言語に存在するかという考察である。局所主義と全域主義の予測の明白な相違は, 例えば「音韻的に条件付けられた異形態交替 (Phonologically Conditioned Allomorphy)」と呼ばれる現象に現れる。特に異形態とその交替を条件付ける要素が同一のPF循環に存在しない場合が重要である。 C_1 -LIN理論によると, 同一のPF循環に存在しない2つの要素はお互いに相互作用することができないので, 自然言語にはこのような現象が存在しないことが予測される。一方, 全域主義理論では形態論と音韻論は並行的に処理されるので両者の相互作用は比較的自由である。よって, 全域主義理論は, 局所主義理論からは予測されない異形態交替が存在することを予測する。そのような異形態交替が自然言語で実際に観察されれば, それは全域主義の正しさを示すことになる。ところが, そのような現象が自然言語で観察されることはない。むしろ観察されるデータは局所主義理論によって予測されるパターンを示している。

4. 課題と展望

形態論と音韻論の相互作用に関しては, Siegel (1974) と Allen (1978) のレベル順序付け仮説 (Level-Ordering Hypothesis) や Kiparsky (1982) の語彙音韻論 (Lexical Phonology) 等で詳しく議論されてきた。これらの研究の出発点は, 形態論と音韻論の間の複雑な相互作用の存在を示す言語事実の発見であった。本書は形態論と音韻論の接触領域の問題を扱いながら, これらの研究で指摘さ

れた言語事実にほとんど言及していない。それらの事実を分析対象に含めると、 C_1 -LIN 理論の問題点が見えてくる。

レベル順序付け仮説では、接辞を「クラスI接辞」と「クラスII接辞」に分類した。その根拠は、クラスI接辞はそれが付加される語基の第一強勢の移動を引き起こしうるが、クラスII接辞はその移動を引き起こさないということであった。(5b)の *-ity* はクラスI接辞、(5c)の *-ness* はクラスII接辞である。

(5) a. *áctive* b. *actívity* (act-iv-ity) c. *áctiveness* (act-ive-ness)

Siegelのレベル順序付け仮説では、強勢付与はクラスI接辞付加とクラスII接辞付加の間で行われると仮定することによって(5b)と(5c)の違いを説明した。ところが、 C_1 -LIN理論はこれら2種類の接辞を区別しない。接辞 *-ity* と *-ness* はどちらも *a* 主要部 (*-ive-*) の外側にある *n* 主要部に挿入される。構造に違いがないので、 C_1 -LIN理論は *activity* と *activeness* の強勢位置の違いを予測できない。特に問題なのは強勢移動がある(5b)である。 C_1 -LIN理論によると、外側の循環主要部 *n* と語根は同一のPF循環に存在しないことになるので(仮定(2d)より)、外側の接辞によって引き起こされる強勢移動は起こらないはずである。

この事実は本書の提案する局所主義理論よりも形態論と音韻論を並行的に扱う全域主義理論と相性がよさそうに見える。しかし、局所主義理論でこの事実を説明することは不可能ということでもなさそうである。例えば、循環主要部をSiegelやAllenが提案した接辞のクラス分けのように分類して、循環主要部の種類によってスペルアウトのタイミングが異なるというように修正することによって解決できるかもしれない。

本書の議論は極小主義・分散形態論の枠組み内の技術的な問題に偏っており、言語資料の分析がややおろそかになっているという印象を受ける。その反面、形態論と音韻論の接触領域という複雑な領域を最小の道具立てで解明しようという意欲的な試みは高く評価できる。局所主義と全域主義の論争に決着をつけるには至ってはいないものの、本書はどちらの立場の研究者にとっても基本文献となることであろう。

参考文献

- Allen, Margaret (1978) *Morphological Investigations*, Ph. D. dissertation, University of Connecticut.
- Kiparsky, Paul (1982) "Lexical Phonology and Morphology," In In-Seok. Yang ed., *Linguistics in the Morning Calm*, 3-91, Seoul: Hanshin.
- Siegel, Dorothy. (1974) *Topics in English Morphology*, Ph. D. dissertation, MIT.